慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	集団意思決定時における、個人の考えを意思決定に反映させる方法についての考察
Sub Title	
Author	岩間, 祐樹(Iwama, Yuki) 高木, 晴夫(Takagi, Haruo)
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2013
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2013年度経営学 第2816号
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002013-2816

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学大学院経営管理研究科修士課程

学位論文（　　2013　年度）

論文題名

集団意思決定時における、個人の考えを意思決定に反映させる方法についての考察

主　査	髙木　晴夫　教授
副　査	井上　哲浩　教授
副　査	高橋　大志　准教授
副　査	

２０１４年　1月　６日　提出

学籍番号	８１２３００８４	氏　名	岩間　祐樹

論 文 要 旨

所属ゼミ	髙木　研究会	学籍番号	81230084	氏名	岩間祐樹

（論文題名）

集団意思決定時における、個人の考えを意思決定に反映させる方法についての考察

（内容の要旨）

国内 MBA ホルダーが転職市場で評価されていないという評判および調査結果から、国内 MBA ホルダーに必要なことは、「経営に関する知見や理論を学ぶ」と同時に「学んだ知見に裏打ちされた自身の考えを相手に認めさせ、既存の組織における意思決定に自分の考えを反映させる」ことではないかという問題意識を持った。この問題意識に基づき、意思決定に自分の考えを反映させるための方法論を導出する目的で当研究をスタートさせた。

髙木研究室の先輩である村田（2013）の研究を引き継ぎ、KBS35 期の討議のテキストデータについてさらなる分析・考察を加えるとともに、36 期の討議のテキストデータを新たに収集して、35 期のデータから導き出された仮説の検証に用いた。

35 期の分析の結果として以下の 2 点の仮説を導出した。1 つ目は、討議の終盤 15 分、つまり最終意思決定が迫った時間帯に発言量を増やした者は、集団の意思決定を個人の意思決定に近づけているのではないかということであり、2 つ目は、特定の語との共起関係を積極的に作った者、つまりグループの他のメンバーが用いた言葉を積極的に用いていた者は集団の意思決定を個人の意思決定に近づけているのではないかということである。ただし 2 つ目については、討議の終盤 15 分で議論の内容が遷移したグループにおいては、その傾向は当てはまらない。

また、研究の当初予定では、集団討議そのものの生産性の向上については分析対象としていなかったのだが、35 期の分析の過程で、メンバーの多くが特定の言葉と共起関係を持っている状態であればあるほど、グループ意思決定の生産性が向上するという仮説が、研究の副産物として導出された。

35 期の分析によって導出された仮説は、36 期のデータによる検証においては、すべて統計上では支持されなかった。この理由は、35 期と 36 期とでは、置かれた環境や前提条件が当初考えていた以上に異なっていたからだと推測している。ただ、35 期の仮説に基づく行動を討議内で顕著に行っていた 36 期の者は、集団の意思決定を個人の意思決定に大きく近づけていることが確認できており、導出した仮説に基づく行動は、環境の影響は受けるにせよ、自身の考えに集団の意思決定を引き寄せるための 1 つの方法論となりうるのではないかという考えに至った。